

動作表現の animate style

— 舞踊の制作における様式の役割 —

国立環境研究所 柿沼 美穂

舞踊は、芸術ジャンルのなかでも、その「作品」が最も危うく脆弱なものの一つである。それは第一に、舞踊が上演芸術であって、上演者（ダンサー）の個別的介入がなければ実際に生じえない一回性の継起的な現象であり、それも一瞬後には消え去ってしまうという性質を有するからである。

さらに、舞踊には音楽における楽譜のような記録が存在しない。舞踊譜（ノーテーション）は存在するが、音楽の楽譜に相当するものではない。ビデオなどによる記録も、三次元に存在する舞踊の全容を記録することは不可能である。つまり、舞踊という芸術は、多くの場合、受容者にとっては現象としてのみ存在するのである。

ところが、現実には舞踊「作品」という認証が行われている。ただし、舞踊が継起的な一回性の現象であるということから、舞踊「作品」は単なる名称、あるいは臆見とはいわないまでも、その時代、その場での共同主観が構成する共通理解の地平にしか存在しないと考えられることが多い。

しかしながら上記のような「作品」認証は、受容者からの視点によるものであり、制作者そして上演者（ここでは実際の現象を生じさせるダンサーの立場を取り上げる）の視点からのそれは、はるかに確固としたものである。もちろん上演者であるダンサーも、現象すなわち個別的な上演という意味における舞踊の「一回性」に関しては、受容者である鑑賞者以上によく理解している。それゆえ、上演者であるダンサーが、強固な「作品」認証をも同時に有するということは、ある意味で非常に不思議なことでもあるのである。

作品を上演し、現象させる上演者としてのダンサーの立場において、鑑賞者ともっとも異なる点は、彼らが「受容する」者でなく、「制作する」者であるということである。これは彼らが「知覚する」というよりも「表現する」者であるということの意味する。知覚と表現は同様の基盤から発すると考えられるが、その発現のしかたや方向性が異なる。そして、上演者であるダンサーにとって重要なのは、「自らの踊りをよく現象させる」ことであり、この意味で、彼らはまず制作する者ということができるのである。

このような知覚と表現の違いについて、フィードラーは「知覚は多様で絶えず移り変わる世界を見るのみであるが、制作する者はそうした多様で漠然とした世界ではなく、ある概念のような切り口（＝様式）をもって新しい、確固とした世界を成立させようとする」と述べた。すなわち、知覚

は現象を漠然と受けとめるのみだが、表現の場合にはある「切り口」、すなわち、ある規範をもとに新しい世界観を自ら構成するということである。もちろんメルロ＝ポンティのように、フィードラーよりも、より積極的な役割を知覚に与えようとする考え方もあり、その方が現実に近いとも思われるが、非常に興味深いのは、フィードラーが、「知覚」には見られない「表現」における特徴として、『ある概念のような切り口』すなわち何らかの規範をもって、それまでになかった『世界を構成』しようとする」という点を挙げていることである。そしてその「切り口」を彼は「様式」と呼んだ。

このような働きをもつ様式とはいったい何であろうか。そしてそれは舞踊においては何にあたり、実際にどのような役割を果たすのだろうか。

まず、この「様式」（スタイル）が示唆するのは、通常の人間の認識における言語のようなものであると考えられる。言語がなければ、人間は漠然としていて絶えず継起的に流れ去る現象を、把握することができない。それでは舞踊において、この様式にあたるものは具体的には何なのか。小林正佳はこれを示唆するかのようになり、われわれは「眼の前にあるさまざまな具体的『形』の背後に、いっそう普遍的な何かとして『型』を直観する」とする。とすれば様式とは、われわれが実際の現象として見える形態を生み出す際の規範や原点のようなものと見なしうるものということになる。

ではこのような「型」（スタイル）とは何か。サーリッジとアーミラゴスはスタイルを「舞踊家の活動と、彼の作品によって顔面通り例示され表現されている特性との間を繋ぐ決定的な絆」とする。それは、ダンサーが舞踊を実際に現象させる際に選択するある動きのしかたということである。彼らはこの例をバレエのバのような動きの一覧表に求め、「空間語彙」と名づけた。さらに彼らはスタイルをIとIIに分類することによって、それが個人的な特性にも、また個人的な領域を超えた特性にも関連するとする。しかし、彼らの考察は受容と制作の視点が絶えず入れ替わっていてわかりにくく、スタイルIとIIの具体的な発現例とその関係などについて、不十分であるように思われる。

このような問題に関しては従来タイプとトークンという概念を用いて考察することが多かったと思われるが、筆者はその概念に再吟味を必要と考えるため、この発表においては、制作する視点を中心として、この舞踊における様式とその役割についてさらに具体的に考察した。この様式はメルロ＝ポンティの身体図式と非常に深い関わりがあり、また世界を編み直す契機となるものである。そして、この様式が、実際の動作において「形」のみでなく、ダイナミックな「質」的要素にも関わるものであることが示されることになる。